



◆生育状況について

5月1日午後5時頃、管内で降雹があり若穂地区の一部で被害が発生いたしました。被害に遭われた皆様には心よりお見舞い申し上げます。

本年の結実は平年並みとなっており、初期肥大を促すため、摘果等が遅れないよう進める。

また、せん孔細菌病は、現状発生は少ないが、安心せず、枝病斑の除去は徹底する。

◆当面の重点作業について

1. 5月末頃より、生理的に不安定な硬核期となっていく。核障害低減のため、急激な摘果・新梢管理にならないよう作業を進める。
2. 薬剤散布を適期に実施する。
3. 雑草管理を含め、タンポポ等はミカンキイロアザミウマの発生源にならないよう除草を徹底する。
4. この時期は、平年並みの降水量でも、不足する時期となるため、積極的にかん水を実施する。
5. 凍害の影響による樹勢衰弱が見え始めた。状況を確認し対策をする。

◆品質向上・苦土補給について

品質向上として、必要に応じて、下記葉面散布肥料を散布する。

1. 使用時期：第6回薬剤散布に混用使用（単用使用してもよい）
2. 使用資材：調合量1000当り

【品質向上対策】

資材名	使用倍率	調合量
オルガミン	1,000倍	100ml
ケルパック66	5,000倍	20g
友果	500~1,000倍	200~100g

+

資材名	使用倍率	調合量
リーフマグ	1,000倍	100g
グリーントップ70	500倍	200g

◆マンガン欠乏対策について

ももネクタリンに発生しやすいマンガン欠乏対策として、必要に応じて、下記葉面散布肥料を散布する。

1. 使用時期：5~6月に2~3回単用使用
2. 使用資材：調合量1000当り

【品質向上対策】

資材名	使用倍率	調合量
グリーンデイズ	500倍	200g
硫酸マンガン	250倍	400g

【もも・ネクタリン薬剤防除】

◆第6回薬剤散布について

1. 散布時期：5月22日（金）～5月26日（火） 実際散布月日 月 日
2. 使用薬剤（混用順記載）※調合量1000ℓ当り・10a当り散布量：500ℓ以上

農薬名	使用倍率	調合量	もも 収穫前	初刈 収穫前	病害虫
固着性展着剤アビオンE	1,500倍	66ml	—		—
トレノックスフロアブル	500倍	200ml	7日	30日	黒星病
マイコシールド	1,500倍	66g	21日	28日	せん孔細菌病
㊤ダイアジノン水和剤34	1,000倍	100g	前日	21日	アブラムシ類・ウメシロカイガラムシ

3. 散布上の留意事項

- 1) 極早生品種（アームキング等）は収穫開始日にかかる可能性があるため、早めに実施する。
- 2) アビオンEに代えて、K. Kステッカー3,000倍（水100ℓ当り33ml）を使用してもよい。
この場合、必ずK. Kステッカーは、最後に混用する。
- 3) ダイアジノン水和剤34に代えて、㊤オリオン水和剤1,000倍（水100ℓ当り100g）を使用してもよい。
- 4) うどんこ病の発生が心配される場合は、コロナフロアブル400倍（水100ℓ当り250ml）又は、イオウフロアブル500倍（水100ℓ当り200ml）を加用散布する。
- 5) せん孔細菌病対策として、第6回・7回の間で、展着剤ササラ3,000倍（水100ℓ当りに33ml）＋クプロシールド1,000倍（水100ℓ当りに100g）＋クレフノン100倍（水100ℓ当りに1,000g）を特別散布してもよい。

◆せん孔細菌病対策について

落花期より春型枝病斑の発生が散見されている。園地により状況が異なるが、果実被害に至ると商品化率に大きな影響を及ぼし収量に影響するため、甚大な被害にならないよう対策を徹底する。

1. 春型枝病斑と葉への感染症状の特徴

- 1) 春型枝病斑は開花期頃から現れ、芽基部がやや陥没し、薄い黒褐色を呈する。5月中下旬頃には黒色の典型的な病斑となる。枝病斑は芽基部に発生し、陥没してひび割れる。ヤニを噴出することもある。
- 2) 枝先端に花腐れ・枝枯れしている場合は、灰星病の可能性も高いが、せん孔細菌病である事もある。
- 3) 葉では、はじめに葉脈で区切られた不整形の斑点ができ、淡褐色～紫褐色の斑点となり、やがて病斑部分が乾いて抜け落ち、不整形の穴になる。
- 4) 果実での発病は、幼果ほど感染しやすく、ピンポン玉より大きくなると感染しにくくなる。

2. 耕種的防除の徹底

- 1) 春型枝病斑の剪除がもっとも重要になる。できるだけ、早く剪除し感染拡大防止を行う事で、かなり被害を軽減できる。
- 2) 発病は6月までだらだらあるため、2～3回程度に分けて、園内の巡回し病斑切除を行う。
- 3) 剪除する場合は、発生部位より枝基側数芽含めて実施する。

◆うどんこ病対策について

1. 発生時期・症状

	もも うどんこ病	りんご うどんこ病 (毛じ障害)
発生時期	落花30日頃から (本年は5月末頃)	落花15日頃から ※満開後20日後～25日頃 (本年は5月上中旬頃)
初期症状	白粉をまぶしたような円形の病斑 毛じ内に白粉が観察される 果皮に異常は見られない	淡褐色～褐色の小斑点 毛じは健全 果皮が淡褐色～褐色に変化
後期症状	菌そうは消え、毛じや果皮が褐変 着色期に目立たなくなる 一部でやや凹んだサビ状になる	被害部はサビ状となる 軽微なものは着色に より目立たなくなる

2. 発生した場合の対策

- 1) 果皮が既に大きく変色したものや、サビ状になっているものは摘果する。
- 2) 被害果が多い場合は、中でも程度の軽い果実や果柄部側(ホゾ側)のものを優先に残し、空枝にはせず、適正着果量を確保する。

◆徒長枝になる新芽の早期掻き取りについて

摘果作業に合わせ早めに掻き取ると。結実量が少ない場合は、特に新梢管理に留意する。

◆新梢管理について

1. 芽かき

- 1) 徒長枝は無駄なエネルギーを使い、樹形も乱し良品生産のさまたげとなる。
- 2) 主枝・亜主枝の背面や大枝の切り口、さらに長・中果枝の基部10cmの直上芽は強勢な徒長枝となりやすいのでかき取る。
- 3) 骨格枝先端近くの脇芽が強く発生する場合はかき取る。

2. 摘心

- 1) 枝の背面から出る芽(新梢)は全部をかき取るのではなく、必要に応じ捻枝や摘心処理して日焼け防止と結果枝確保に利用する。
- 2) 摘心は5月下旬と6月下旬の時期に5～7葉で切る。

3. 捻枝

- 1) 主枝延長枝など主軸の枝と競合する2・3番目の新梢や内向枝を捻枝することにより樹形構成・結果枝確保ができ、秋冬期の剪定量も軽くなり樹勢は安定する。
- 2) 直射日光が当り日焼けを起こす幹や主枝の背面に新梢を捻枝誘引して覆いかぶせることによる日焼け防止策の2面である。
- 3) 5月下旬～6月上中旬頃(新梢長50cm位)に実施する。

4. 新梢誘引

- 1) 若木や幼木の主枝・亜主枝候補は、支柱を添え丁寧に誘引する。
- 2) 主枝先端を下げない。上げすぎない。

◆本摘果について

生理落果や核割れ果の発生を軽減するため、予備摘果をしっかりと実施した上で、本摘果に移行していく事が重要。本摘果時は、生理的に不安定な硬核期に実施する事になるため、急激な作業にならないよう注意をする。

1. 時期：果形の良否がはっきり判別できる満開40～50日頃（5/末～6/月上旬頃）に行う。
2. 摘果基準

表1. 結果枝別の摘果基準

	予備摘果	本摘果
長果枝（30cm以上）	4～5果	1～2果
中果枝（30～10cm）	2～3果	1果
短果枝（10cm以下）	1果	5本に1果
強長果枝	6～7果	3～4果

表2. 葉枚数から見た着果基準（本摘果時）

	もも	ネクタリン
早生種	40枚	30枚
中生種	50枚	40枚
晩生種	60枚	60枚

3. 留意点

- 1) 長手で大きくて扁平な果実を残す。正常な色沢の物を残す。
- 2) 左右均等に肥大した丸い果実は、双胚果であるので落とす。
- 3) 小さい果実、奇形果、病虫害被害果、上向き果を落とす。
- 4) 葉芽がある果実を残す。
- 5) 主枝や亜主枝上の果実や結果枝の基部の果実は落とす。

